

# 旧大乘院庭園の調査

## — 第407次

### 1 はじめに

奈良文化財研究所では、旧大乘院庭園を管理する(財)日本ナショナルトラストから委嘱を受けて、本庭園の復原整備に向けた基礎資料を得るための発掘調査を、平成7年度から平成17年度までの11年間にわたって継続的に実施してきた。これまでの調査の結果、岸辺を大胆に隆起させたダイナミックな東大池の造景や、繊細な意匠を巧みに組み合わせ変化に富んだ景観を造り出していた西小池の存在など、近世までの華やかで豪華な庭園の姿が明らかになっている。

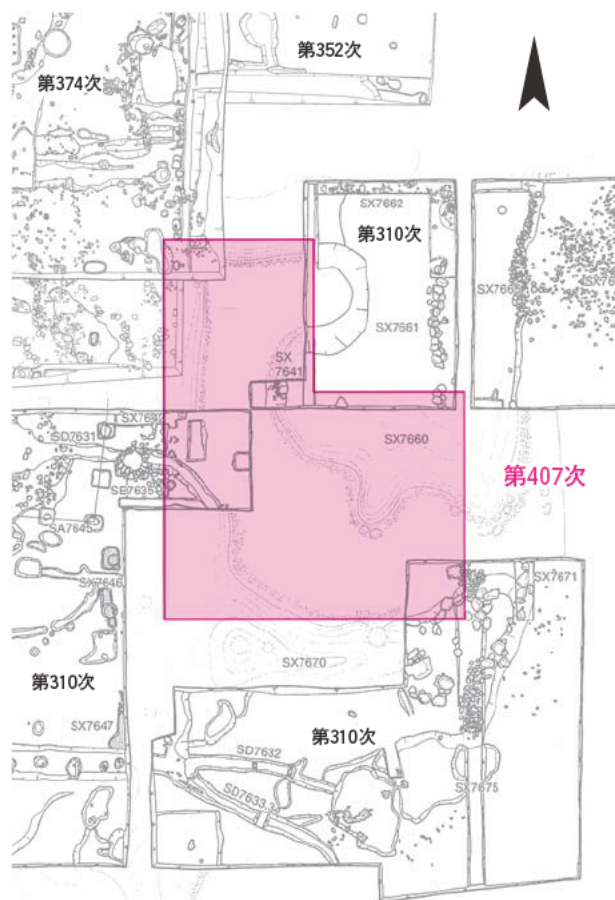
今回の調査は、東大池西岸に入江状に残された西小池の遺存部分を調査対象とした。この部分については、平成12年に西小池推定部分の調査(第310次)を実施するにあたり、西小池の形状を唯一と定める遺構である可能性を考慮して、あえて調査区からはずした経緯がある。これまでの調査で西小池全体を埋め立てて現在の東大池西岸を造成していることが明らかになったことから、西小池の全容の解明を目的として今回の調査が計画された。調査期間は平成18年7月3日から8月9日、調査面積は144㎡である。

### 2 大乘院と大乘院庭園

大乘院は、現在の奈良地方裁判所付近に立地していた一乗院とならび両門跡と称された興福寺の門跡寺院のひとつである。平安時代に現在の奈良県庁付近に創建され、治承4年(1180)の平重衡による南都焼き打ちの後、現在地に移転したと伝わる。

現在の大乗院庭園の原形は、宝徳3年(1451)の徳政一揆による焼亡の後、尋尊大僧正によっておこなわれた境内の再興において、庭師・善阿弥親子の手によって形づくられたものである。近世に入ると大乘院庭園は、南都隋一の名園とうたわれるほど著名な庭園として名を馳せ、その姿は『大乘院四季真景図』や『大乘院殿境内図』などからうかがい知ることができる。

明治以降、大乘院が廃絶して一時荒廃したが、昭和33年(1958)に「旧大乘院庭園」として国の名勝に指定され、再び庭園としての整備が進められている。



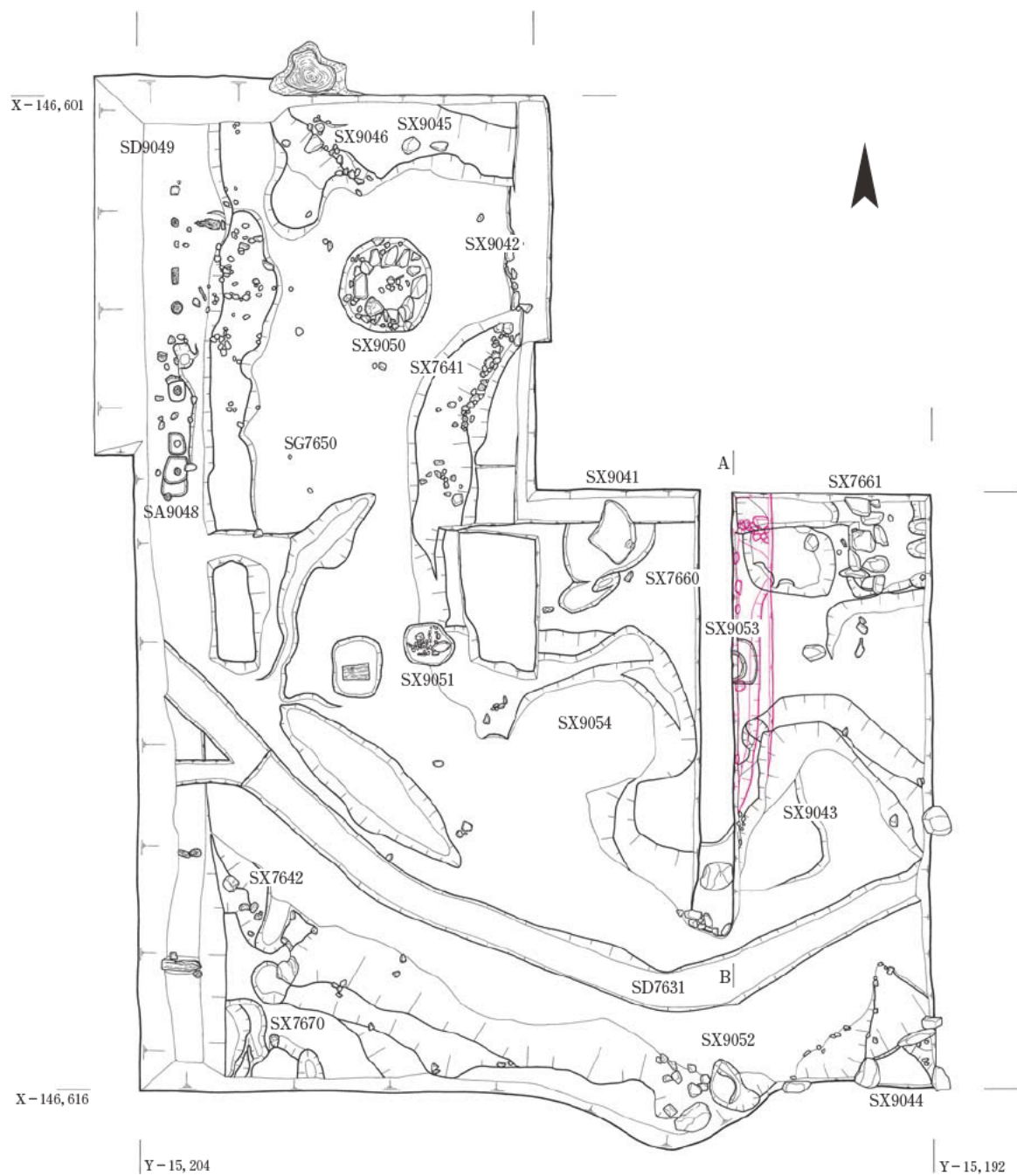


図194 第407次調査 遺構平面図 1 : 100

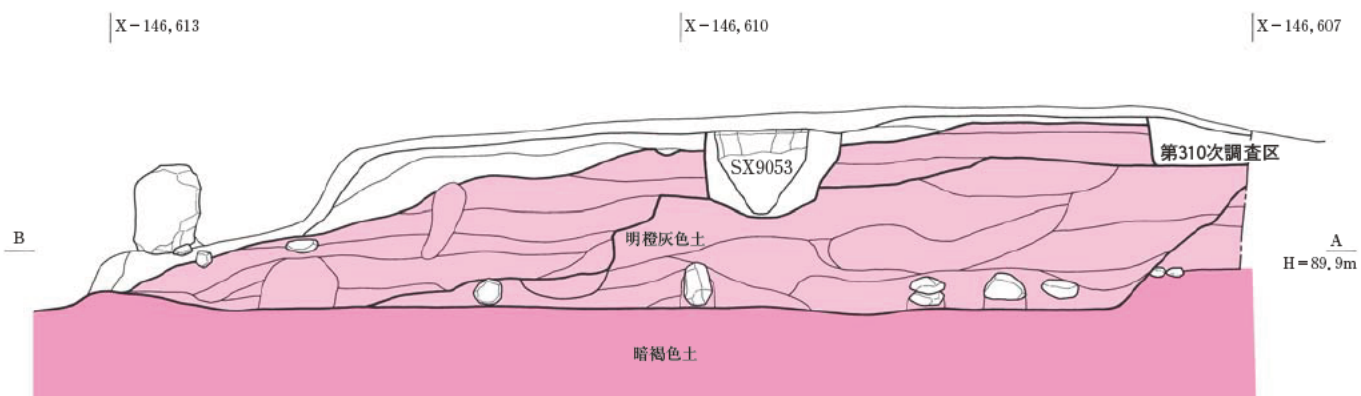


図195 第407次調査 東岸断面 1 : 40

た南北畔際の断割調査によって地山の緩やかな起伏の上に盛土をして、現況に近い形状の岸辺が造成されたことが確認された。

**SX9045** 現在の西小池の北岸。東岸と同じくカワラケ混じりの明橙灰色砂質土を積み上げて造成される。

**SX7670** 現在の西小池の南岸。北岸・東岸と類似した明橙灰色砂質土で造成されるが含まれるカワラケは微量である。第310次調査で検出済みであり、地山のたかまりの上に盛土をしてさらに高く造成されることが確認されている。

**SX9042・SX9054** 東岸SX7660の岸辺を切り込む掘り込み。このうちSX9042は北岸と東岸が接する西小池の入隅部分にあり、現状では西小池の一部を形成している。しかし旧来の汀線の礫敷とみられるSX7641・SX9046を切り込み、また岸辺の形状が円形を呈することから、大乘院庭園が廃絶した近代以降に掘り込まれたものと判断できる。SX9054は東岸がL字型に屈曲する出隅部分に掘り込まれた円形の土坑で、鉄パイプ片やコンクリート片など近代の廃棄物が大量に埋まっていた。また、この掘り込みは昭和13年（1938）に作庭家・重森三玲が作成した大乘院庭園の実測図に描かれており、廃棄のために掘られた土坑ではないことがわかる。大半が埋立てられて変貌した西小池の岸辺の形状を整えるために掘り込まれたものであろうか。

**SX9043** 東岸SX7660の東大池との取り付け部分で検出した入江状のくぼみ。近代以降に積まれた土層で覆われる状況は岸辺の他の部分と同様であり、造成当初から入江状を呈していたものと考えられる。



図196 第407次調査区全景（北から）

**SX7641** 東岸SX7660にある礫敷で、直径10cm程度の礫が標高89.8～89.9m付近に密に分布する。第310次調査で検出済みで、西小池の汀線に敷いた礫敷と考えられる。

**SX9046** 北岸SX9045にある礫敷で、直径10cm程度の礫が標高89.8～89.9m付近に分布する。残存状況はあまり良くないが、本来は東岸の礫敷SX7641と一体で西小池の汀線を形成していたと考えられる。

**SX7642** 南岸SX7670にある礫敷で、直径15～20cm大の石が標高89.8～90.0m付近に分布する。残存状況はあまり良くないが、かつて西小池の汀線を形成していた礫敷の一部と考えられる。

**SX9044** 南岸SX7670の東大池との取り付け部に設けられた石組。直径50～70cm大の石の下端を標高89.7～89.8m付近に揃えて並べる。現在は石がまばらに残るのみだが、かつては景石や礫敷を組み合わせる変化のある汀線を形成していたのであろう。

**SX9041** 東岸上に置かれた直径1m大の大石。据付掘形が確認できず、岸の造成と同時に設置されたものとみられる。詳細な性格は不明であるが、その形状や上面を平坦に据えることから園路の踏石とも考えられる。

**SX7661** 第310次調査で検出した、東岸上を南北方向にのびる石組。今回はその南端を検出した。据付掘形が確認できないことから、SX9041と同様、岸の造成と同時に設置されたとみられる。直径30cm大の石をやや乱雑に南北に並べ、根石のような様相を呈することから、東岸の稜線に設置した何らかの庭園施設の基礎と考えられる。



図197 東岸SX7660（南西から）

**SX9051・SX9052** 池岸の下端で検出した景石の据付および抜取痕跡。このうちSX9051は東岸のL字形の出隅部分にある据付穴で、直径約70cmの円形の掘形の中に根石を残す。一方、SX9052は南岸の石組SX9044の中にある抜取穴で、直径70～80cm程度の不整な円形を呈する。穴の深さは池底から約10cm。

**SX9050** 池底北端で検出した石組。西小池SG7650の池底に堆積した一連の泥土を完全に除去した段階で検出した。直径約1.4mの掘形に15～25cm大の自然石を円形に並べて2段に組む。残存する深さは約40cm。石組内の埋土はほとんど遺物を含まない暗青灰色粗砂で、池底の堆積土とは状況を異にする。また石組の中に石が投棄されていないことから、上部が破壊されたとは考えにくく、本来から池底に掘られたものとみられる。これと類似した石組は第310次調査および第374次調査でも検出しており井戸と解釈されてきた。しかし、SX9050については、上述した遺構の状況から井戸とするには問題があり、何らかの庭園施設の一部と考えられる。石組が機能した正確な時期は不明だが、埋没状況から考えれば室町時代の庭園の再整備以前に遡る可能性が高い。

**SX9053** 東岸SX7660上で検出した埋甕。直径約50cm、

深さ約45cmの円錐形で、一辺約70cmの方形の掘形に据え付けられる。これと類似した埋甕は東大池西岸において多数検出しており、その多くは明治時代に設置されていた小学校の便所の遺構と解釈してきた。ただしSX9053については東岸SX7660の突端部に位置するため便所の遺構とは考えにくい。なお、甕内からは瓦質の焜炉2個体が出土した。

**SD7631** 南岸SX7670に沿って池底に掘削された蛇行溝。第310次調査において検出済み。溝の幅は約60cm、深さは約30cm。埋土は池底の堆積土と一連の黒褐色の泥土である。第390次調査で検出した南池西半池底のSD8979に接続することから、東大池の水を外へ排水するために掘削されたものとみられる。

**SD9049** 近代に西小池の大半を埋め立てて形成したSG7650の西岸上を走る南北溝。溝の幅が約90cm、深さが約80cmの逆台形断面を呈する溝で、埋土には近現代の建築廃材等を多量に含む。鉄道院が奈良ホテル（明治42年竣工）の建設過程において敷地境界に掘削した区画溝とみられ、この時にホテルの敷地造成で生じた瑜伽山の切土を利用して、西岸の最上層の積土もおこなわれている。

**SA9048** 南北溝SD9049の底部で検出した南北掘立柱



図198 石組SX9050（北西から）



図199 据付穴SX9051（南西から）

列。逆台形断面の溝の心に柱列を配する状況は、第310次調査で検出した東西溝SD7630と類似する。全体に残存状況が悪く、SD9049の掘削で破壊されたとみられる。南北の延長線上で、それぞれ「工」の刻印がある石柱を検出していることから、明治40年(1907)に鉄道院(前工部省鉄道局)が取得した土地を区画した当初に設置した仮設の柵の可能性が高い。(金井 健)

## 4 出土遺物

土器・土製品、瓦磚類、木製品および石器が出土した。このうち主なものについて以下に記す。

### 瓦磚類

出土瓦磚類の一覧を表20に掲げた。そのほとんどが近世以降のものである。特徴的なものとしては、「BIZEN」

表20 第407次調査出土瓦磚類集計表

| 軒 丸 瓦   |        |         | 軒 平 瓦    |         |       |
|---------|--------|---------|----------|---------|-------|
| 型式      | 種      | 点数      | 型式       |         | 点数    |
| 巴（中世）   |        | 1       | 近世       |         | 3     |
| 巴（江戸後半） |        | 1       | 近世以降     |         | 1     |
| 近世      |        | 1       |          |         |       |
| 型式不明    |        | 2       | 軒平瓦計     |         | 4     |
| 軒 丸 瓦 計 |        | 5       | 棧瓦（近世）   |         | 1     |
|         | 丸瓦     | 平瓦      | 磚（レンガ含む） | 凝灰岩     | 土管    |
| 重量      | 11.0kg | 100.9kg | 55.8kg   | 0.8kg   | 4.1kg |
| 点数      | 63     | 691     | 108      | 9       | 16    |
| 道 具 瓦   |        |         |          |         |       |
| 擬斗瓦     | 2点     | 瓦製円板    | 2点       | 隅切丸瓦    | 1点    |
| 輪違い     | 2点     | 格子叩き平瓦  | 1点       | 刻印付きレンガ | 4点    |



図200 第407次調査出土刻印付きレンガ 1:3

「INBE」と刻印された耐火煉瓦などがある。おそらく備前市伊部産であろう。また、凸面に格子タタキを残す平瓦が1点出土しているが、白鳳期に遡るものである。

(林 正憲)

### 土器・土製品

第407次調査では整理箱4箱分の土器・陶磁器が出土したが、その多くは近世～近代のものである。西小池SG7650の堆積土や池岸の積土は中世土師器片を含むが、近世～近代の陶磁器も多い。このほかには、埋甕遺構SX9053に設置されていた瓦質の甕1個体と、その内部から出土した瓦質の焔炉2個体がある。いずれも近代のものと考えられる。

### 石 器

西小池南岸(CA33区)の表土から、縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土した。サヌカイト製で、器面は灰黄色に風化している。先端側と基部とを欠き、折損の状況からは使用時に破損した可能性がある。調整剥離は押圧剥離により、基部～逆刺を作りだしたのちに体部を整形している。A面には斜並行剥離がよく残る。なお、この石器を包含していた土層は明黄色の粘土であり、近傍から運ばれてきた客土と考えられる。よってこの石器は、大乘院庭園の近くに本来埋蔵されていた可能性が高く、周辺の調査では注意を要する。(森川 実)

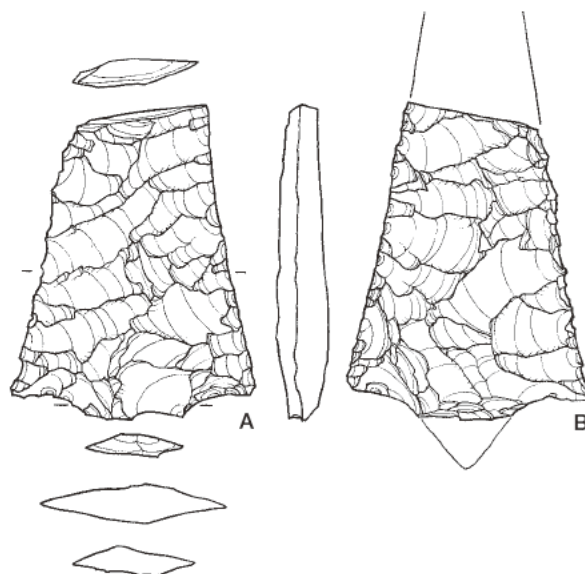


図201 第407次調査出土有舌尖頭器 1:1

## 5 SX9050の石材

『大乘院四季真景図』に多数の庭石が描かれていることからわかるように、大乘院庭園において石材は重要な構成要素のひとつである。今回の調査ではSX9050の石材について材質調査を付せて実施した。

SX9050は2段の石積が残存しており、底部に底石はない。石積の裏込めには地山に見られる花崗岩、チャートおよび片麻岩の円礫と同様の礫が用いられている。石積に用いられている石材の大きさは径約20cmから40cm弱であり、比較的小さなものは転石と思われる球状から円盤状のものがそのまま用いられていると考えられる。比較的大きなものについては割られた痕跡が認められ、い

ずれの石材も剥離によって生じた平滑な面を内側に向けて配置されている。

石材の多くはアプライト質花崗岩、片麻岩ないし片麻状花崗岩、および安山岩であった。アプライト質花崗岩はややベグマタイト質であり、石英や長石類の巨晶が見られるものである。片麻岩ないし片麻状花崗岩には明確な区別はないが、片麻構造の明確なものは片麻岩とし、それ以外のものは片麻状花崗岩とした。これらはいずれも奈良市付近に分布する領家花崗岩類と推察される。また安山岩はその表面が風化作用により灰白色を呈しており、内部は黒色を呈する無班晶のものである。この安山岩はいわゆる三笠安山岩と呼ばれるもので、岩石としては両輝石安山岩に分類されるものである。さらに1点のみ上記いずれの岩石とも異なる石材が認められた。偏光顕微鏡観察の結果、班晶として斜長石、黒雲母、高温型石英の外形を有する石英が認められ、石基は隱微晶質の石英から成ることが認められた。これらのことからこの石材は斜長流紋岩と推察される。(脇谷草一郎)

## 6 まとめ

今回検出した西小池の岸の形状はこれまでの所見通り『興福寺旧大乘院庭苑図』(1939年模写)に描かれた状況と合致しており、同図の信頼性をあらためて確認できた。西岸をのぞく各岸の造成時期を示す積極的な根拠はないが、東岸の断割調査の結果、緩やかな暗褐色土のたかまりの上に橙褐色土を一度に積み上げて現況に近い立体的な岸边をつくりだしている様子がうかがえることから、この造成を室町時代におこなわれた境内の再興とあわせて考えるのが妥当であろう。

一方、池底に掘り込まれた石組SX9050は埋土が池底の堆積土と状況をまったく異にし、ほとんど遺物を含まないことから、現在の西小池が整備される室町時代以前に遡るものと推定できる。ただし石組は2段と浅く、上部が破壊された痕跡も残さないことから、そもそも池底に掘削されたものとみられ、井戸として機能したのではなく、何らかの庭園施設であった可能性が高い。

この他、景石や露地、橋脚など『大乘院四季真景図』などに描かれる庭園施設に関連する遺構の検出が期待されたが、東岸の南端で景石を据え付けたとみられる根石を残す掘形SX9051を1基検出したのみである。(金井)

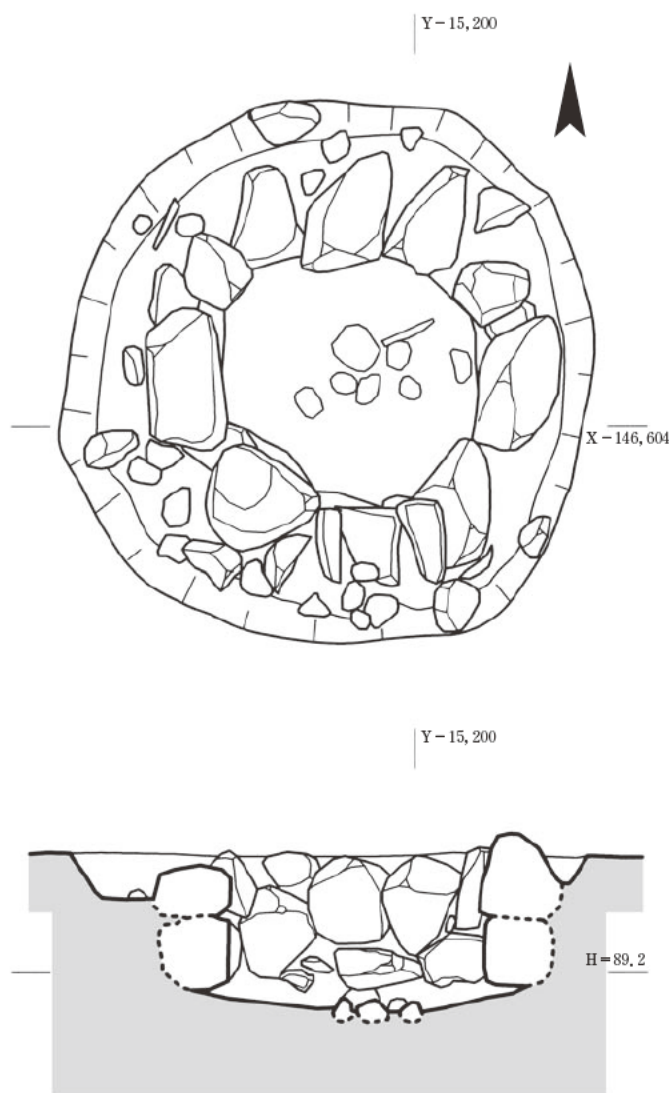


図202 石組SX9050 遺構平面図・断面図 1:20